

英語で講義をするということ

東條 加寿子

私が参加する研究チームは日本人教員が英語で行う講義について科学教育を事例として研究しています。大学の、しかも科学教育とは英語教員養成からほど遠い話であると思われるかもしれませんが、しばしお付き合いいただければ幸いです。今、大学ではグローバル化の一連の流れの中で、講義を英語で行うことが求められています。グローバル化拠点として選ばれた 30 の大学(グローバル 30)は英語だけで学位を取得することができるプログラムの実現を急いでいます。最も大きなインセンティブは、日本の大学に世界各地から多くの留学生を誘致したいということでしょうが、同時に、日本人学生も日本に居ながらにして他国の学生と共に学び国際化を体験できるキャンパスにしたいということもあるのでしょう。1983 年に留学生 10 万人計画が打ち出された際には、日本で学ぶ留学生には日本語能力が前提として求められましたが、2008 年からの留学生 30 万人計画では英語で学位取得ができるような改革が大学側に求められています。時代の要請による大きな政策転換です。そして、このような大学の国際化は理工系の領域でそのニーズが高く、理工系講義を英語で行う大学は増加の一途をたどっています。

さて、日本の大学教員にとって専門分野を英語で講義することとはどのような状況を意味するのでしょうか。専門分野の講義に慣れている教員にとっても英語で講義をするとなるとその負担は大きく、『英語で講義をすると失われるもの』^{注1}といった論説が象徴するように大きな問題を抱えています。

そこで私たち研究チームは、理工系大学教員の喫緊の課題に対応できる支援ツールとして、アメリカの大学の理工系講義を集めてコーパスを構築し、英語で講義をするための有用な表現が検索できるようなサイトを開発しました。このサイトを活用すれば、英語らしい表現を取り入れた英語らしい講義を実現することができるようになるのではないかと考えたのです。

しばらく経って、私たちはあることに気づきました。アメリカの大学の講義を模倣して英語で講義をすることと日本人科学者が英語で講義をすることは全く「異なる」ということです。

そもそも、科学教育は日本が近代国家になってから西洋から持ち込まれたものですが、日本ではそれらの科学的概念をすべて日本語に翻訳して取り入れてきたという他国にはない大きな特徴があります。当然のことながら、日本語に翻訳される過程、あるいは日本語を介

して科学教育が行われる過程で日本独自の科学教育へと変容してきた可能性があります。さらに、自然観と一体化し人間をとりまく環境をよく観察して類型化していく日本型の科学教育は、概念を抽象化し理論化していく欧米型の科学教育と相対峙すると言われていません。

日本人教員が英語で講義をすることは、単に欧米の英語の講義をそのまま模倣することではなく、それぞれに固有な教育文化に対する認識を高め、その違いを活かし反映させた講義をすることでしょう。ここで取り上げた言語と科学教育文化の問題は、私たちが携わる英語教育の根底に流れている言語と文化の問題を再認識させるものだと考えています。

注1) 斎藤誠 (2013) 「文科省グローバル人材育成推進事業への疑問 英語で講義すると失われるもの」『中央公論』2013年2月号 58-63.

(東條加寿子 教授/教員養成センター)
